

掲出は、『吾輩は猫である』第十章の夏目漱石自筆原稿。この章は、明治三十九年（一九〇六）四月、雑誌『ホトトギス』第九巻第七号に掲載されました。二

十四行二十四字詰の松屋製原稿用紙（二三・一×三一・〇cm）六十二枚が、一枚の欠けもなく、現在は折本に貼り付けられています。画像中の「漱石」の名は、おそらく雑誌編集側により校正・割付の際に書き加えられたものでしょう。雑誌『ホトトギス』掲載時には、「漱石」に改められています。原稿用紙の二十六枚目の左半分には切り取り跡があり、その用紙裏には割付時に書かれたと思われる文字が見えます。原稿用紙欄外右下に押捺された「神」等の印は、この原稿の活字を選んだ文選工の印でしょう。この頃は金属で出来た一文字ごとの印鑑のような

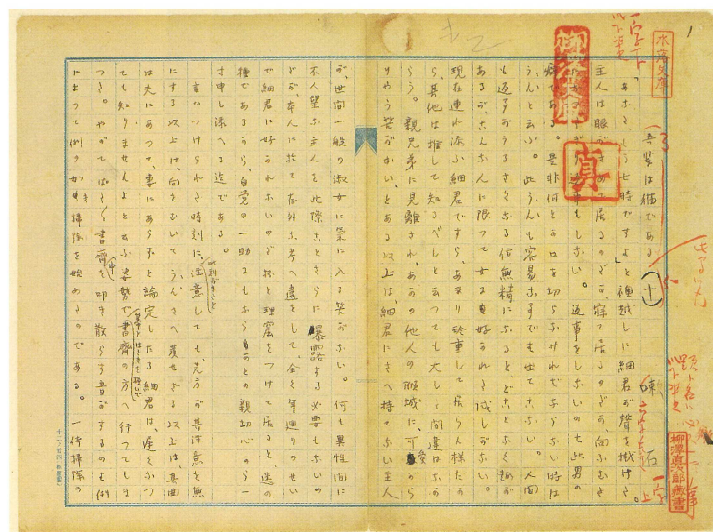
ものを一つ一つ手作業で並べて印刷しており、その金属で出来た文字を活字、それを原稿通りに選ぶ人のことを文選工と呼んでいました。当資料には旧蔵者水落露石の識語と、折本になる以前に使用されていたと思われる和綴時の表紙・裏表紙も残されています。また各所に捺された蔵書印は、この原稿が受け継がれてきた歴史を思わせます。成稿の本文はすでに知られていますが、校正・割付時の書き入れや漱石の書き直し前の文言が確認できることは、自筆原稿ならではの魅力です。（天理図書館 池谷 礼）

◆自筆ならではの魅力

漱石の思いが滲む原稿

「吾輩は猫である。名前はまだない」この言葉を、誰もが一度はどこかで耳にしたことがあるのではないだろうか。印象的な書き出しで始まるこの物語が、夏目漱石の書いた『吾輩は猫である』という作品です。はじめは第一章のみの掲載予定でしたが、人気が出たため第二章と書き続けられ、第十一章で幕を閉じました。

吾輩は猫である 第十章



▶【わがはいはねこである だい10しょう】

夏目漱石自筆

1帖

明治39(1906)年頃

縦23.7cm 横32.0cm



＜天理図書館のお知らせ＞

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>

本書は、天理大学創立100周年を記念して、天理図書館が開催する「漱石・子規・鷗外—文豪たちの自筆展—」(5/18～6/15 天理ギャラリー・東京、10/15～11/17 天理参考館・天理)にて展示します。

※最新の情報については公式HP、X(旧 Twitter)でご確認ください。